身代わり王女の恋物語（なろう版）

みきまろ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

身代わり王女の恋物語（なろう版）

【Ｎコード】

Ｎ９１２７Ｚ

【作者名】

みきまろ

【あらすじ】

故郷の村を焼かれ、生きるために国を作り王となった男と、歴史ある大国の王女として、和平のためその男に嫁ぐことになった王女との恋物語。◆以前グループサイトに投稿したものに、（こりずに）大幅に加筆修正したものです。ヒロインの登場は第二話からになります。

1　大陸歴五四三年～オーレリア村～

「ラウル、起きな！　朝だよ」

村の朝は早い。
夜明けとともに祖母に起こされて、ラウルは眠い目をこすりながら家の隣に建てた鳥小屋へと向かう。
十数羽の鶏たちは、ラウルが来たのに気付くと、小屋の入口につめかけて騒ぎ出した。

「ほいよっと。今出してやるからな」

ひっかけるだけの錠をはずし、扉を開ける。

「うわっ」

ばさばさばさーっ
羽毛が舞う。
鶏たちはギャッギャッとけたたましい音を立てて、庭に駆けて行った。

「やれやれ。
お、今日はたくさんあるな」

鶏たちが出て行った小屋の中には、新鮮な卵が産み落とされていた。
持ってきた籠に卵を拾って入れ、小屋の掃除をする。
さらに庭で虫や草をつついていた鶏たちにえさをやり、卵を台所に置いて畑の見回りに出た。
道端に咲く、名もない野花（のばな）。

村人が丹精込めて育てている畑の野菜は、日の光を受けてつやつやと輝いている。
その畑の向こう、柵で覆われた場所では、朝露に濡れるやわらかな草を山羊(やぎ)が食(は)んでいる。
ラウルは村の一番外側まで来ると、村を守る防護囲いが壊れていないか、夜の間に獣に荒らされていないかなどを調べた。
そして、村の端にある両親の墓に道で摘んだ花をたむけ、祖母の待つ家へと足を向けた。

朝日に輝く、のどかな村の風景―
この村に生まれて十四年。毎日見てきた景色だったが、それが永久に続くものではないことを、ラウルは知っている。
戦争だ。
小国の諍いから始まった戦争は、周りの国を巻き込み、だんだんと大陸全土へ広がりを見せていた。
軍備のために少しずつ税が重くなり、大人たちは徴兵される。
初めは遠い国のことと思っていたが、ラウルの住むここオーレリア村にも、少しずつ影響が出始めていた。
今はもう、１５歳以上の男はいない。
年寄りと子どもだけになったこの村で、自分にできることは何か。
そう考えて、彼は村の見回りを自らの日課としていた。

「おはようさん、ラウル」

もうすぐ家だ、朝飯はなんだろうと思いながら歩いていると、隣人に声をかけられた。

「おはよう、ダンじいさん。
東の縄が少し緩んでたから、直しておいたよ。」

「おお、ありがとう。いつも見回りご苦労じゃの。
最近このあたりも物騒でなぁ。囲いを強化しようかと話しておる。
わしらだけじゃとてもおいつかんて、その時は手伝いを頼むよ」

「わかった。ティエリーと一緒に行くから、声かけてくれ」

「助かるわい。よろしくな」

手を振って、ダンと別れる。
家の木戸を開けたところで、今度は先ほど話に出てきたティエリーがいるのに気付いた。

「やぁ、ラウル」

「よぉ。おはよう。こんな朝早くからどうした」

「いや……」

ラウルの家の裏にある大木の陰から出てきたティエリーは、何か言いたそうに口ごもった。
朝から待ち構えているくらいだ、よっぽどのことがあったのだろうと思うが、無理に聞きだすのも悪い。
ひとまず、ラウルはダンに頼まれた件を伝えることにした。

「あのな、ダンじいさんが囲いの強化を手伝ってほしいって言ってた。
後で声がかかると思う」

「あぁ、そうか。
うん。それはいいんだ。それは……」

顎に手を当てて地面を見つめるティエリー。
明るい茶色の髪が、さらっと頬にかかる。
真っ黒で頑固な直毛のラウルの髪とは大違いだ。
違うといえば、大雑把なラウルと違い、優しげで人当たりの言いティエリーは、村の女たちにとてももてた。
戦争で、若い男をとられた村の婚姻事情は深刻だ。
ラウルより一歳(ひとつ)上の十五とはいえ、村で一番年かさの男であるティエリーは、すでに女たちに狙われていた。

もしかして、そっち方面の悩みだろうか。
だとしたら俺は役に立てないぞ。

妙に焦りつつも、ラウルは年上の友を気遣う。

「ティエリー？　どうした？」

「……なんでもない。心配かけてごめん。
そうだ。もうすぐ剣が打ちあがるんだ。
出来たら一番に知らせるからな」

「うん、楽しみにしてる」

手を振って、ラウルはティエリーが家に帰るのを見送る。
ティエリーの父親は、村で唯一の鍛冶職人だった。
なかなかにいい腕で、時には打った剣を都に納めることもあった。
けれどこの前の冬に、その腕を買われて徴兵されてしまった。
村で剣を必要とすることはないが、鋤や鍬は使う。
壊れた農具の修理ができる人がいなくなり困った村人を見かねて、
ティエリーが見よう見まねで修理を始めた。

父親の手伝いをしたこともあったようで、その出来栄えはなかなかのものだった。
すると、そのうちに剣を作ってみたいと言い出した。
ティエリーは父親が残した道具や材料をかき集めて、修理や畑仕事の合間にこつこつと鍛え始めた。
そうして作った初めての一振りが、もうすぐできあがるという。

「できたら、触らせてくれるかな」

足元の枝を拾って構える。

ひゅっ

何とも頼りなげな軽い音がした。

ティエリーには自分の道がある。
俺には、村の見回りや手伝いくらいしかできることがない。

ひゅっ

ラウルは、枝を振るう。
何度も、何度も。
胸にくすぶる思いを断ち切るように――

「ラーウル、どこ行ったんだい！
朝飯だよ！！」

祖母が呼ぶ声が聞こえた。

「はぁい、今行く！」

ラウルは枝を放ると、祖母の待つ家に駆け戻った。

「わああぁぁぁぁぁ！！！」

ある日の夜、村に火が放たれた。
突然の出来事に、村人たちは逃げ惑った。

「うっ、こりゃ……何事じゃい。
ラウル！　ラウル、どこだい！」

「おばぁ、こっちだ！　早く！　逃げよう！！」

ラウルも祖母の手を引いて、家を飛び出す。

事の発端は、昼間村にやってきた、見慣れぬ5人の男たちだった。
皆一様に疲れ果てた顔をして、どこの国のものかわからない、ちぐはぐな軍装に身を包んでいた。
自分たちは、戦地から逃げてきた。
どうしても家族の元に帰りたい。
一夜の宿と食べ物を恵んでほしい、と言った。
親切な村人は、快く彼らを受け入れた。

「ひゃはははは！
気楽に暮らす馬鹿どもめっ
おまえらに戦争の苦労がわかるか！」

ところかまわず剣を振り回し、もうすぐ収穫を迎えるはずだった作物を荒らすのは、昼間子どもに会いたいと泣いた男。
他の男は、家々を回り、金目のものや食料を強奪している。
逃げながらも、ラウルは男たちの様子を目で伺う。
……一人足りない。

「きゃあぁぁぁぁ！
やめてっ、やめなさい！」

「へへっ
気の強い女は嫌いじゃねぇよ。
ほれ、逃げてみろ。逃げてみろよ」

悲鳴を聞きつけて振り向けば、いないと思った男が見事な金髪の女の手をつかんで、引きずり回していた。
つかまれているのは、ダンの孫で今年十七歳になるアディだ。

「や、やめろ、孫に手をだすな」

「うるせぇ、じじい！　引っ込んでろ！」

どかっ
男がダンを蹴り倒す。
腹を押さえたダンは、地面に横たわって動かなくなってしまった。

「おじいちゃん！　あぁ……」

「くくっ。
女ぁ。さっきまでの威勢はどうした。

そうさ、弱いもんは強いもんに逆らっちゃいけねぇんだよなぁ」
男は、下卑た笑いを顔に浮かべると、アディを物陰へと引きずって行った。

「おばぁ、村の墓地まで歩けるか。
そこで待ち合わせよう」

「ラ、ラウル。
おまえ、どこへいくんだい。まさか……」

「村の人が襲われてるのに、ほっとけないだろう」

「や、やめておくれ。
アディ《あのこ》はかわいそうじゃが、おまえまでいなくなったらわしは……」

「おばぁ、後でな！」

「ラウル！！！」

祖母が叫ぶ声を背中で聞いて、ラウルは男が消えた方向へ向かう。
途中、倒れたダンを抱き起して、手近な塀に寄りかからせる。
腹は痛そうだが、大丈夫、命に別状はなさそうだ。

「ダンじいさん！
アディのことは俺にまかせろ！
村の墓地で待っていてくれ」

「あぁ、ラウル……ラウル……頼んだぞ……」

弱々しく上げられた手を、ぎゅっと強く握ってから、ラウルは駆け出した。

くそっ

あの男、どこへ行った。

近くの家の裏にはいなかった。

炎に照らされる村の中を、必死に走る。

親とはぐれた子や道端で放心している村の女などに、墓地へ向かうよう声をかけながら、武器になりそうなものを探した。

「ちっ

こんなものでもないよりましか」

落ちていた鎌を拾ったその瞬間、

「いやあああぁぁぁぁあ！！！！！」

すぐそばの小屋の中から叫び声がした。

「アディ！」

夢中で目の前の木戸をけやぶる。

そこで見たのは、殴られたのだろうか、頬を腫らしつつも男を睨みつけているアディと、彼女にのしかかり、醜い尻をさらす男の姿だった。

「てめぇ！　何してやがる！」

怒りで、目の前が真っ赤に染まった気がした。
無我夢中で、手に持った鎌を力いっぱい男の肩めがけて振り下ろす。

「ぎゃあぁぁぁぁ！」

鎌を肩に突き刺したまま、男がもんどりうった。
その隙に、アディの手をとり引き寄せる。

「アディ、早く、こっちだ！
大丈夫？　何もされてない！？」

「あぁ、ラウル、ありがとう。まだ何も……」

がくがくと震える彼女は、それだけ言うのが精一杯の様子だった。

「よかった！　立って、ほら」

衣服を引き裂かれ、大きく開いた胸元に上着をかけてやる。
自分より頭一つ背の高いアディの腕を肩に掛け、なんとか立たせて
逃げ出そうとしていると、

「こんのくそがきがぁぁっ
なめた真似しやがって！！！！」

さっきの男が肩から抜いた鎌をもって、襲いかかってきた。
足元に落ちていた棒で応戦する。

「くそっ、アディ、村の墓地だ！　村の墓地へ向かって！！」

「ラウル、だめ……。

足に力が入らない」
いつもは強気のアディも、恐怖のため腰が抜けてしまったのか。
小屋の隅に座り込んで、動けそうにない。

「くっ」

鎌の切っ先が、ラウルの首筋をかすめる。
棒の先で男の胴体を突いて、少しでも自分たちから離そうとするが、
だんだんと、アディ共々小屋の隅に追い詰められた。
男が鎌を振り上げる。

これまでか。
おばぁ、ごめん。

アディを背中にかばって、ぎゅっと目を閉じた。

「ぐはっ」

「ラウル！」

血しぶきがとぶ。
アディがラウルの背中をつかむ。
どさりと鈍い音がして、倒れたのは――アディを襲おうとしていた
男のほうだった。

「大丈夫か！？」

「ティエリー！　あ……。助かった」

ラウルがほぉっと長い息を吐く。
男は、背中を斜めに切られて絶命していた。
ティエリーの手には、血に濡れた一本の剣。

「それ、もしかして」

「あぁ。夕方、打ちあがったんだ。
明日おまえに見せようと思ってたんだけど、こんなことになるなんて」

軽く振って血を払い落し、ティエリーは剣をラウルに渡す。
そしてアディの体の下に腕を通すと、よいしょと抱き上げた。

「アディ、怖かったな」

「ティル、ティル……うぅっ……」

アディは、泣きじゃくってティエリーの首にしがみつく。
ラウルはといえば、男の死を確認し小屋の外の様子を伺ってから、
ティエリーに向かって顎をしゃくった。

「生き残った人たちは村の墓地に向かってる。
俺たちも行こう」

「あぁ。
その剣はおまえが持っていてくれ。
きっと俺よりうまく使えると思う」

「ティエリー？」

「ふっ
知らないとでも思ってたのか？
毎日こっそり家の裏側で素振りの練習をしていただろう。
それはおまえの剣だ。
おまえのために作ったんだよ」

そうだったのか。
両親が死んでから、一生懸命俺を育ててくれたおばぁ。
いつも温かく声をかけてくれる人々。
俺に懐いてくれる村の子どもたち。
いつかこの手で守れるようになりたいと思っていた。

そんなラウルの想いを、友はわかっていてくれた。

「ありがとう、ティエリー。
大事にする」

「ははっ
初めて作ったからな。強度はわからないぞ。
切れ味は……。まぁ、さっき見た通りだ」

絶命した男の傷口を見る。
ぱっくりと割れたそこは、黒ずんできた血の間に、白い骨をのぞかせていた。
一撃でこの威力。
軍に徴兵されるほどの職人の息子は、確かな技を受け継いでいた。

「急ごう。みんな待ってる」

「あぁ！」

ティエリーに声をかけて、小屋を出る。
剣を持つ手に力を込めて、ラウルは祖母の待つ墓地へと駆け出した。

時は流れ――

「ラウル、そろそろ時間ですよ」

山積みの書類に署名を書きなぐっていたラウルに、ティエリーが声をかけた。

「……ちっ、面倒くせぇな。」

がりがりと頭を掻くと、勢いをつけて立ち上がる。

「あなたね、仮にも王様になったんだから、もうちょっと上品になさい」

「うるせぇな。上品な王様がよけりゃ、おまえがやれ」

あの日。
村を出た二人は、一つの国を作った。
国の名は、村と同じ、オーレリア。
その執務室には、一振りの剣が飾られている。
今見れば、材質こそ良いものであれ、決してほめられた出来ではない。
装飾の一つもなく、重さのバランスもいまいちだ。
しかし、この剣がここまでの二人を支えてきた。

「ようやくこぎつけた和平ですからね。へまをしないでくださいよ」

「はっ

自分の名前くらい書けらぁ」

執務室の扉が開く。

彼らの悲願が、目の前にあった。

2　大陸歴五六〇年、デナーシェ歴三三四年～デナーシェ～

デナーシェ王国の第一王女、リュシエンヌが死んだ。
遠乗りに出かけ、飛び出してきた子兎を避けようとして落馬したのだ。
運悪く、リュシエンヌが落ちた先には、藪の影になってわからなかった崖があった。
全身を打った彼女は、そのまま亡くなってしまった。

「リュシエンヌ……。こんなことになるとは……」

デナーシェ城の地下にある、王族の墓所。
リュシエンヌの兄で、若き国王でもあるリシャールが、妹の棺を愛おしそうに撫でている。

リシャールが知らせを聞いたとき、彼は国境近くの街道にいた。
そのときはまだ、妹が怪我をしたようだ、としか聞かなかった。
怪我と聞いて思い浮かべたのは、リュシエンヌではなく、もう一人の妹リゼットだ。
今年十八になるリゼットは、何歳(いくつ)になっても落ち着きがなく、城を抜け出してはそこここに擦り傷を作って帰ってきた。
大方、今回もお忍びで出かけて足でもひねったのだろう。
そう思った。
何せ、裁縫と読書が趣味であるリュシエンヌと違い、リゼットの趣味は狩りだった。
森に分け入っては、兎や鳥を獲ってくる。
そんなことをする王女なんて、どこにもいない。
城の料理人は新鮮な食材を喜んでいたが、リシャールにとっては頭

の痛い行動だった。

だから、彼は国境での仕事を終えてから城に戻った。
仕事とは、街道の安全確認である。
通常なら警備隊のものにやらせることだったが、この道は、リュシエンヌが一週間後の婚儀の日に通る道だった。
そう。
リュシエンヌは、一週間後に婚儀を控えていた。
十五年続いた戦争で大陸一の大国となったオーレリア国の若き国王と。

――十五年戦争。
今ではそう呼ばれる戦争が終わって早四年。
大陸中を巻き込み、たくさんの命が落とされた。
唯一の中立国であったデナーシェも、戦争とまったく無縁でいられたわけではなかった。
リシャールたちの父、すなわち前国王は、戦争が終わるまでずっと心を痛めつづけた、やっと終結した二年後に病に倒れ、はかなくなった。
さらに一年後には、王の後を追うように、王妃も亡くなった。
それゆえに、二十七歳という若さでリシャールが即位した。

十五年戦争の戦勝国は、戦争のさなかに建国の宣言をし、ばらばらになった国々をまとめてあっという間に力をつけた、オーレリアだった。
オーレリアは、勝利を宣言するとすぐに、敗戦国に戦争の賠償を求めた。
敗戦国は、大小合わせると二十以上にのぼった。

それらとオーレリアが個別に条約を結んでいては、どれほど無理難題をふっかけられるかわからない。
敗戦国の国王たちは、ない知恵を絞って話し合い、結果、デナーシェを頼ってきた。
すなわち、唯一の中立国であるデナーシェが、敗戦国のまとめ役となり、オーレリアと交渉をしてくれないかと。

デナーシェに、それを引き受ける義理はなかった。
しかし、戦勝国（オーレリア）と敗戦国がごたごたしている間に、戦後二年がたち、父王は倒れ、いまだ落ち着かない大陸の様子に人心が荒れ始めていた。
即位したてのリシャールは、敗戦国であろうと多くの国々に貸しを作ることを目的とし、代表を引き受けた。

和平交渉の日。
使者を通じてある程度のやり取りはしていたが、リシャールは内心不安だった。
敗戦国側がこれ以上出せないと言って提示してきた金額は、賠償とするにはあまりにも安すぎた。
さらにデナーシェからは、和平の象徴として、デナーシェの王女との婚姻をあげていた。
地盤を固めたいリシャールにとっては、妹を嫁がせてでも、オーレリアとのつながりが欲しかったからだ。
そんな見え透いた手を、オーレリア側はどうとるか。

交渉の為、デナーシェ城にあらわれたオーレリアの王は、若かった。
たぶん、リシャールと同じくらいの歳だ。
髪は黒。マントも黒。
引き締まった体を包む軍衣も黒で、瞳だけ真っ青だった。

気に入らない。

一目見て、リシャールはそう思った。
今は王を名乗っているが、所詮戦争のどさくさに紛れて起った王だ。
どこの馬の骨かわからない。
その証拠に、言動は粗野で、上品さのかけらもない。
三百年以上の歴史をもつデナーシェの王城において、少しも委縮する様子もなく、自信に満ち溢れた表情(かお)をしているのも気に入らない。
さらにいえば、もっと気に入らないのが、その瞳だ。
森の湖を思わせる青い瞳は、はじめは挑むようにリシャールを睨んできた。
なんだと思って睨み返したら、つぎは嘲笑するように細められた。
そして最後は満足そうに、リシャール(こちら)を見つめてきたのだった。

こんな奴に大事な妹をやるのか。

国の為、己の治世のためとはいえ、リシャールは少し後悔した。
オーレリアの王のほうから難癖をつけてくれればいいとさえ思った。
しかし、オーレリアの王は、安すぎる賠償金にさえ文句一つつけることなく、和平に調印(サイン)をした。

そうして迎えた婚儀。
二人いる妹のうち、どちらが嫁ぐかという話になった。
すると、当然のようにリュシエンヌが自ら嫁ぐと言った。
王族の務めであるし、年も自分の方が近いから、と。
リュシエンヌは、二十二歳であった。

婚儀の準備は着々と進んだ。
あの日の連絡を聞くまでは。

「兄様、あの……」

「！」

リュシエンヌの棺の前でリシャールが物思いにふけっていると、背後から遠慮がちに声をかけられた。
驚いたリシャールが振り返る。

「あぁ、リズ。おまえか……」

墓所の入口には、悄然とたたずむリゼットがいた。

「ごめんなさい。お邪魔だったかな」

「いや、ちょうどいい。話がある」

「話？」

リシャールが国境から帰ってきたとき、妹たちのどちらの出迎えもなかった。
もう夜なのに城にいないのはおかしと思ったら、つきっきりで怪我人の看護をしているのだという。
そんなに酷い怪我だったのかと、リシャールは旅装を解く間もなく見舞いに行こうとした。
しかし、妹の部屋にたどり着く前に、老体をかがめて平身低頭するオズバンド侯爵に遭遇した。
オズバンド侯爵家は、デナーシェ王家に継ぐ血筋と権力を持ち、父王の代から家族ぐるみで付き合いのある男である。
なぜそんなことをするのかと聞けば、未だ誰にも秘密にしているが、王女は怪我をしたのではなく死んだのだという。

『死んだ！？　どちらが？』
そう尋ねたときのリシャールは、兄としてではなく王として頭を働かせていた。
『……リュシエンヌ様でございます』
『そうか……』
『私（わたくし）がついていながら……。
誠に申し訳ありません』
遠乗りには、リシャールが国境に向けて旅立った日に、リュシエンヌとリゼットで連れ立って出かけたのだという。
付き添いは、オズバンド侯爵家。
リュシエンヌたちは、姉妹の最後の思い出にとオズバンド侯爵に遠乗りをねだり、オズバンド侯爵も快く引き受けて、家をあげて警護にあたったという。
しかし、事故は起こった。
『此度（こたび）の責任、どうとるつもりだ』
『はっ。陛下の御心のまま、どのような処分も受ける覚悟でございます』
たとえ王女たちの望みだったとしても、髪の毛一筋とて傷をつけたら大問題だ。
それどころか今回は、王女の一人が死んでしまった。
責任をとって、侯爵本人は断首。

家督を取り上げ、一族の国外追放あたりが妥当か。
『そうか。追って、沙汰を知らせる。
とりあえずは、婚儀をどうするかだな』
腕組みをし、思考をめぐらせる。
答えはすぐに出た。
『陛下……。
僭越ながら、まだ発言を許されるのであれば、方法は一つしか』
『わかっている。それしか方法は、ない』
和平の調印では、“デナーシェの王女”としか約束しなかった。
しかし、そのあとリュシエンヌの絵姿を、オーレリア側に送ってしまっていた。
国同士の婚姻では、盛大な披露宴やパレードが行われることが恒例だ。
その際に、花嫁の髪の色や瞳の色に合せて、調度品や花が選ばれる。
リュシエンヌの髪は黒。リゼットの髪は栗色だった。
さらに婚儀一週間前ともなれば、互いの名前入りの記念品なども作られているはずだった。
いまさら、下の妹が嫁ぎますとは言いにくい。
『リゼットを、リュシエンヌの身代わりとして嫁がせよう』

「兄様？　あの、話って？」

「あぁ。
リズ、一週間後、おまえが第一王女（リュシエンヌ）としてオーレリアに嫁げ」

「……！」

リュシエンヌの棺の前。
そう告げた兄に、リゼットは驚く。

「それは、姉様のふりをしてってこと？」

「そうだ」

兄の言葉にリゼットが戸惑ったのは一瞬だった。すぐにこくりとうなずく。
いくらおてんばとはいえ、リゼットもデナーシェの王女だ。
ある程度予想をしていたのだろう。
もしかしたら、リシャールが帰ってくるまでに、オズバンド侯爵と話をしていたのかもしれない。

「急な話で悪いな」

「ううん。私も王女だもん。
この婚儀がどれくらい大事なものかはわかってるつもり。
でも、もしあちらの方に気づかれたら……」

「そこはおまえ次第だ。うまくやってくれ」

「……わかった」

けなげに微笑む妹を抱き寄せる。
胸の前で合された両手が、わずかに震えていた。

「リズは、リュシィが落ちたところを見たのかい？」

髪を撫でながら聞く。
昨日の夜、城に着いてすぐにオズバンドに遭った。
その後は対策に追われ、妹（リズ）の顔を見たのは今が初めてだった。
彼女はリシャールがリュシエンヌの死をどうするかを決めるまで、城の奥に身を隠していたのだ。
リュシエンヌの死を隠し、リゼットの存在を隠し、王が戻るまで待った。
オズバンドの采配だった。

「私、姉様の前を走っていたの。
悲鳴が聞こえて、慌てて戻ったときには、姉様も、姉様の馬の姿もなかったわ。
オズバンド侯爵様が駆けつけて、みんなで見つけたときには、もう……」

「そうか。このことを知っているのは、リズとオズバンドと、オズバンド家の従者だけだったな」

「うん。
あの、オズバンド侯爵様はどうなるの？　遠乗りについてきてくれた従者たちは？
兄様、まさか口封じなんてしないわよね？
私が、私が悪いの。
姉様を遠乗りになんて誘ったから……」

遠乗りは、リズが言い出したことだったのか。
肩を震わせ、涙を流す妹を抱きながら、リシャールは得心がいった。
さして好みでもないのに、この大事なときに遠乗りにでかけたリュシエンヌ。
よりによってリシャールがいないときに出かけたのは、普段リゼットの奔放ぶりにいい顔をしていなかったからか。
姉と遠乗りなんて、リシャールに言ったら許してくれないと思ったのかもしれない。
でも、どうしても最後の思い出に行きたい。
オズバンドは、そんなリゼットの心情を察して、付き添いを引き受けた。
陽光の下（もと）、楽しそうに馬を走らせる二人を、年老いた侯爵は微笑みながら見つめていたことだろう。
こんなことにさえならなければ、姉妹のいい記念になったはずだった。

「処罰は、まだ考え中だ。
しかし他の貴族の手前もあるから、そう軽いものにはできないな」

「……そう。そうよね……。あぁ……」

苦しそうに息を吐くリゼットを、リシャールは優しく撫でる。
ふわふわの綿毛のような髪と妹のぬくもりが、少しずつ彼の心に兄としての悲しみを呼び起こした。

「リュシエンヌ……。
死んでしまったのか」

「……」

リシャールはリゼットを離すと、そっとリュシエンヌの棺に手を掛けた。

「まだ、顔を見てやっていなかったな」

「あ！」

ぎしっと蓋をあけようとして、釘が打たれているのに気付いた。

「なんだ？　どうしてもう封じてある？
通常、埋葬までは開くようにしてあるはずだが」

「あの、兄様。
実は姉様のお顔は、崖から落ちた衝撃で酷く腫れてしまっていて……。
私が、そうしてくれるようにお願いしたの。
みんなに、一番きれいなお顔で覚えていてほしいと思ったから」

そんなに酷いのか。

見れば、釘がしてあったのは上半身だけで、蓋の途中に切れ目が入れてあり、下半分は開くようになっていた。
リゼッとの懇願を受け、リシャールは足元だけを確認する。
見覚えのあるドレス。
リュシエンヌが気に入ってよく着ていたものだ。
そのまわりには、彼女が好きだった花が敷き詰められていた。

利発で、しっかり者だったリュシエンヌ。

若くして即位した兄を、いつも励まし支えてくれていた。
あふれそうになる涙を、ぐっとこらえる。
泣いている場合ではない。

「リズ。もう一つ頼みがある」

「はい」

「リズは”リュシエンヌ”としてオーレリアに嫁ぐ。
そして”リゼット”は……リュシエンヌの代わりに死んでくれ」

「……はい」

兄と共に墓所を出て、リゼットはリュシエンヌの部屋に行く。
これからは、リゼットがリュシエンヌとして過ごすためだ。
扉を閉めると、ほぉっと息をついて、革張りの白いソファに身を沈めた。
もうすぐリシャールがリゼットの死を発表する。
遠乗りにでかけて怪我をしたのはリゼットだ。
怪我が悪化して、死んだのもリゼット。
第二王女（リゼット）は死んだことにして、六日後には予定通り第一王女（リュシエンヌ）が嫁ぐ。

「お疲れ様です、リゼット様。
リシャール様のご様子はいかがでしたか」

「ユリア……」

最も信頼のおける侍女が差し出したお茶を、身を起こして受け取る。
薫り高いお茶は、疲れた心をふんわりと溶かしてくれた。

「リゼットではなくて、リュシエンヌよ。
これからは、私のことはリュシエンヌと呼んでちょうだい」

「あ、はい。申し訳ありません」

ユリアはリゼットたちの乳母の娘であり、幼いころから共にそだった乳兄弟である。
リゼットにとっては、いつも自分の幸せを願ってくれる、優しくも頼もしい、もう一人の姉であった。
もちろん、隠し事など何一つできない。
そう、隠し事なんて……。

「兄様、泣いてたわ。
涙こそ見せなかったけど、あれは絶対泣いてた。
兄様に……本当のことを言ってあげられたらいいのに」

「リゼ……リュシエンヌ様。
それは……」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9127z/

身代わり王女の恋物語（なろう版）

2012年1月2日20時50分発行